

V 教育課題

第13分科会 キャリア教育

■ 研究課題 ■

勤労観・職業観を育むキャリア教育の推進と校長の在り方

■ 分科会の趣旨

現在、我が国は社会環境の変化に加え、少子高齢化、産業・経済の構造変化、雇用の多様化、流動化などが、子どもたち自らの将来の捉え方にも大きな変化をもたらしている。子どもたちは自分の将来を考えるのに理想とする大人のモデルを見つけにくく、希望あふれる夢を描くことも難しい。さらに、そのような変化は、子どもたちの心身の発達にも影響を与え始め、身体的、精神的、社会的側面の全人的発達にアンバランスさが顕れてきている。人間関係をうまく築くことができない、意思決定ができない、自己肯定感をもてない、将来に希望をもてないなどの子どもの増加が浮き彫りとなり、自分の未来を切り拓いていく「生きる力」を身に付け、社会の激しい変化に流されることなく、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応し、社会人として自立していくことができるようにする教育が強く求められている。

そのためには、未知の知識や体験に関心をもち仲間と協力して学ぶ楽しさを通して、挑戦する勇気とその価値を体得することで生涯にわたり学び続ける意欲を維持する基盤づくりが必要であり、これまでも学校の実践として、自然体験や社会体験の体験活動が将来の社会人としての基盤づくりが行われ勤労観・職業観の形成を図っている。

したがって本分科会では、自立した社会形成者育成の観点から、一人一人が働く意義や目的を探究して、自分なりの勤労観・職業観を形成・確立していく過程への指導・援助を幅広く見直し、学校・社会を関連付けた特色ある教育、社会人としての基礎的な資質・能力を身に付ける教育、さらには、異校種間の連携と協働による教育、家庭・地域と連携した教育などキャリア教育を推進するための具体的方策と校長の果たす役割について明らかにしていく。



■ リーダーシップの視点

(1) 自尊感情を高め、自己や他者への積極的関心を形成・発展させる教育課程の編成

これまでのキャリア発達に関わる諸能力を4領域（「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」）、8能力（自他の理解、コミュニケーション、情報収集・探索、職業理解、役割把握・認識、計画実行、選択、課題解決）を、「基礎的・汎用的能力」（「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」）で補強した。より一層現実に即して社会的・職業的に自立するために必要な能力を育成しようとするためである。この点を踏まえ6年間（もしくは9年間、12年間）を通して意図的・継続的な教育課程の推進、改善における校長の果たす役割と指導性を明らかにする。

(2) 身の回りの仕事や環境に関心をもち、目標に向かって努力する態度の育成

小学校におけるキャリア教育は、実践を通して、学校生活と社会生活や職業生活を結び、関連付け、将来の夢と学業を結び付け意欲を喚起することが重要になってくる。ここでは、学校を取り巻く地域、社会、自然、文化と関わる体験活動を広げ、地域の人と関わる中で、多くの人々が自分を支え、社会を支えていることを学び、自分もいつかその一員になる意欲と態度を育む必要がある。そのためには、地域の教材を生かすこと、地域の人々とどうつながり、子どもたちをどう包んでもらうか、また学校関係機関との連携や働き掛けが必要となってくる。小中高が豊かな連携を図りながら、子どもの発達時期にふさわしい自分を取り巻く環境に応じて、自分の行動や考え方を変容させたり、環境に働き掛けたりしてより良い状態を形成し、自分らしい生き方を展望し実現していくキャリア発達を促す活動をていねいに設定するため、校長の役割と指導性について究明する。



社会的・職業的自立を目指したキャリアの教育の推進

～家庭・地域との協働による教育活動の推進と校長の在り方～

宗谷地区 礼文町立船泊小学校 坂本孝行

I 趣 旨

少子高齢化社会、産業・経済の構造的変化、雇用形態の多様化・流動化などを背景として、子どもたちの進路を巡る環境は大きく変化している。子どもたちが将来直面するであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応し、社会人・職業人として自立していくため、より一層のキャリア教育の充実が求められている。

学校教育において豊かな体験を保障し教育の質を改善し続けることが求められている。社会は、生活経験によるところが大きい総合的な学力を求めている。一方、子どもは様々な体験に乏しく、自分に何ができて、何を学びたいか、どんな道を進みたいか、夢や希望がもてず漠然とした不安をもち、その未熟さが指摘されている。社会の変化が予測しにくい時代となり、子ども自ら未来を切り拓いていく力を身に付けさせる必要性が高まっている。そのため、子どもたちが主体的に地域と関わり、社会貢献を果たすことができる地域の教育力を高めていかなければならない。

子どもの発達上の様々な課題は、学校教育だけでは解決されない。宗谷管内では、子どもの自立を目指し、地域住民・保護者と連携・協働し「子育て運動」を進めてきた。地域の豊かな教育環境を生かした特色ある教育活動の推進と、子育ての協働により子どもたちが安心して学ぶ環境を共に創り、その実践が進められている。

校長は、子どもの実態や地域の実情を踏まえ「基礎的・汎用的能力」を育成するための地域連携と学校づくりの改善に指導性を発揮しなければならない。キャリア教育の充実・改善において、学校が、地域・家庭とつながり、相互に役割を認識しながら教育力を高めていくことが重要である。

自立した社会形成者育成の観点から、学校と地域・社会を関連付けた特色ある教育、家庭・地域、異校種間との連携・協働による教育など、自立を目指す教育の改善を進める現状と、キャリア教育の推進に向けて、校長の在り方や果たす役割について明らかにする。

II 研究の概要

1 宗谷の教育の特色

(1) 子どもを取り巻く環境と実態

宗谷の子どもたちは、豊かな自然・産業に恵まれ、広大な土地や海に囲まれた環境で育っている。自然にふれ、社会、働く人に接し生活している。

しかし、メディアと接する時間が多く、基本的な生活習慣の確立・学習習慣の確立が課題となっている実態は、都市部と大きく変わらない。子どもの孤立は、人との関わり方の問題に、さらに、自己肯定感・有用感が低い傾向に表れている。

そこで各学校は、社会的自立を目指し、これからの社会に貢献できる力を育み、ふるさとへの誇りと愛着をもつ子どもを育てる環境を地域とともに創り出す努力を続けている。

(2) 宗谷の自然と産業

宗谷管内は、二つの海（日本海、オホーツク海）に囲まれ、沿岸地区と利尻、礼文二つの離島では豊かな水産資源に恵まれている。内陸部は、広大な牧草地が広がり、酪農が営まれている。「利尻・礼文・サロベツ国立公園」に位置する5市町村では、直接その豊かな自然に触れることができる。

(3) 地域ぐるみの子育てと小中連携・一貫教育の推進

宗谷管内の子どもたちは、地域行事への参加率は高い。地域ぐるみの「子育て運動」を展開し、地域・家庭・学校の教育力を相互に高めることを目的に、子育て・教育に関わる関係者と共に子どもの自立を目指してきた成果の一つである。さらに、子育て運動を前進させる手立てとして、小中連携し9年間の教育を紡ぐ取組を進めている。また、保育所、高校とも積極的に連携を図り、交流を深めている。

(4) 宗谷校長会の活動

宗谷校長会は、「宗谷の風土に根差した豊かな自然に育む子ども」をテーマに掲げ、管内教育の充実・発展に努めてきた。

今年度活動の重点として、「生きる力を育む教育課程の編成・実施・評価・改善に努め、愛情と信頼に満ちた学校経営とその充実に努める」他、研修活動の充



実や会員相互の連携を強化し、関係機関・団体と連携を図りながら地域に根ざした信頼される学校づくりを目指す取組を進めている。

2 「研究課題」を究明する視点

(1) 自尊感情を高め、自己や他者への積極的関心を形成・発展させる教育課程の編成

- ・働くことの実践的な理解を深め、他者と関わる力を育てる教育課程の編成
- ・各教科・領域等を横断的・総合的に指導できる校内体制の整備

(2) 身のまわりの仕事や環境に関心をもち、目標に向かって努力する態度の育成

- ・発達に応じた人、社会、自然、文化と関わる体験活動
- ・社会生活の中での責任や勤労などの概念を理解・定着させる教育活動の推進

〈視点1〉 地域の特性を生かす校長の役割
 〈視点2〉 豊かな体験活動を推進する体制整備と校長の役割

3 宗谷のキャリア教育

(1) 地域の”素材を生かす”

宗谷管内の各学校では、地域の「産業」から学ぶ学習として、鮭やホッケの燻製づくり、鮭稚魚の放流水産加工場見学、昆布養殖、ウニむき体験、牧場見学による搾乳体験、漁業士・漁師、酪農家他、地域で働く人を講師に学ぶ出前授業、また、身近な「自然」環境から学ぶ学習として、サロベツ自然学習、野鳥観察、高山植物などの体験活動が教育課程に位置付けられている。

これらの活動では、子どもたちが直接仕事にふれ、働く人に関わる体験活動を通して、地域を深く知り、働く意義を見出すとともに、社会や自然に対する関心を高めると考えている。

(2) 地域の人と”共に創り出す”

宗谷管内では多くの学校が、運動会や体育祭、学芸会、学校祭などの学校行事や高齢者福祉施設等で「南中ソーラン」「よさこい」など踊りを中心とした文化活動を発表する場を設定している。これらの活動は、児童生徒の自主性や主体性を育む他、一つの地域文化としてしっかりと根付いている。

これらの取組を通し、地域住民と関わる中で、子どもたちの生き生きとした姿が地域・保護者に認められ、また、応援されることにより、自尊感情を高め、地域への愛着を形成する機会となっている。

校長は、地域に根差した特色ある教育活動の推進、地域とつながる文化を、開かれた学校づくり、信頼され

る学校づくり推進のため、経営方針に位置付けている。

(3) 学校間で”連携する”

キャリア教育の視点で学校間連携による教育課程の編成も進められてきた（稚内市宗谷沿岸地区、礼文町、利尻町）。また、地域行事において、校区の小中学校が連携し、児童生徒が共に参加し交流している。

小中連携・一貫教育の推進とともに、キャリア教育を視点とした異校種間のつながりを深めている。学校が連携することにより、地域で子どもを育てる関係を創るとともに、子どもたちが安心して学ぶ環境を整えることを目指している。

4 地域の実践例～各地区・学校の実践と校長の役割

(1) 枝幸町「鮭燻製づくり」

オホーツク海に面した南宗谷では、子どもたちが海で働く人と身近にふれ生活している。枝幸町岡島小学校では、地域の特産物である鮭を使い、漁組、保護者の協力を得、「燻製づくり」を伝統的な活動として行っている。春先の稚魚の放流、地引き網体験と併せ、つけ込みから袋詰めまでの製造過程を体験している。体験・作業を通して漁業への関心が高まり、命をいただくことや協力して仕事をする大切さを学んでいる。

校長は、漁組、PTAに活動の意義を理解していただき、協力を依頼するとともに、活動の様子を校内外に発信し、地域との結び付きを大切にしている。

(2) 稚内市宗谷沿岸地区「水産学習」

宗谷中学校では、古くから「ふるさとに学ぶ産業教育」を地元漁協や保護者のもとより、市の支援を受け進めてきた。漁労・製造・流通までを学ぶ「水産活動」は、就労の苦勞と喜び、創造性、人との関わりを学び「社会で生きる力」育成を目的としている。

中学校区にある三つの小学校では、小中一貫した教育課程の編成に取り組んできた。中学校の「水産活動」とつながるキャリア教育として、「ミニ水族館」「磯遊び」「サケ学習」「稚魚放流」「水産加工場見学」が行われ、また、中学校の「水産タイム」にも参加している。

子どもたちは、直接指導を受ける地域住民へ信頼感を持ち、命を育む自然と働く人への感謝の気持ちが育まれ、活動への意欲と自信につながっている。

これらの取組の基盤となっているのは地区校長の連携である。互いに研修を深め、積極的に地域住民・保護者による教育参加を促し、関係機関との結び付きを強化していくことが、地域の産業を生かした体験活動を推進する力となっている。

(3) 稚内市・豊富町「酪農体験学習」

酪農を基幹産業とする豊富町は、牧草地に囲まれ、



サロベツ牛乳の工場が町の中心部に隣接している。酪農の学習は農協職員による出前授業、NPO法人（サロベツエコネットワーク）の協力を得てサロベツの自然を学ぶ学習等、総合的学習の時間、社会科を中心に教育課程に位置付けている。

稚内市街地の学校でも、農協の協力により、酪農の仕事の説明、牛舎見学と搾乳など、給食で飲んでいる牛乳が作られる実際と日常につながる体験活動により、身近にある仕事への関心、意欲を高めている。

農協の食育推進事業や酪農家の協力、NPO法人の課外学習の受け入れ、バス利用における行政の支援など、地域の関係機関と積極的に連携することにより、豊かな体験活動が進められてきた。

(4) 学校と地域をつなぐ文化活動・地域交流

「全国南中ソーラン交流祭」(稚内)では、各学校の伝統文化が発表・交流され、地域に開かれている。地区の祭りなど地域行事でも、踊りや太鼓、鼓笛演奏など学校の文化活動が地域に披露され、地域住民・保護者に大きな拍手をもらっている。

質の高い文化が支持され、期待されることにより、自校の文化に誇りと自信をもち、児童生徒自ら伝統を受け継ぐ喜びを感じ、地域活動への参加、地域と関わる意欲を高めている。

家庭・地域・学校、相互の信頼関係は、学校が積極的に地域と関わる中で創られてきた。校長は、自ら町内会（自治会）や育成会（育成部）と関わり、また教職員も直接地域と関わり役割をもつなど、地域で育てる環境づくりを進めている。

(5) 保小中高連携によるふるさと学習「礼文学」

「礼文学」は、礼文町の小中高一貫したふるさと学習であり、「ふるさと礼文に学ぶ活動を通して、ふるさとへの誇りと夢を見出し、21世紀をたくましく生きる力を育む」をテーマに「自然と生活文化」「社会の仕組みと将来設計」「地域交流と伝統文化」を内容系列とし、10年間脈々と受け継がれている。

子どもの発達段階に応じた指導計画は、礼文町教育研究会（町研）礼文学連携部会が研究・交流を行い、各学校の特性や環境を生かし編成されている。また、基礎学力部会「礼文検定」とともに、連携・一貫教育の柱として学校経営方針に位置付けている。

町内の小中高全ての学校が参加し、ふるさと学習で学んだことを地域に発信する「礼文学発表会」が毎年行われている。昨年度の発表では、人との関わりの中で、働く喜び、支えてくれた人の温かさやふるさとを大切にしたい気持ち、また、「観光大使活動」を通して感じた満足感・充実感が伝えられた。

学校間・教職員間の連携により、教職員の協働の意

識が高まり、子どもの実態、地域の実態に基づいた学習の工夫・改善に積極的に取り組んでいる。

このような取組を支えているのは、町校長会を中心とした管理職の強固な連携である。各学校の状況や課題について交流し、理解を深めながら礼文教育の充実・発展を目指している。昨年度もこの10年間の研究活動を町研全会員で総括し、新たな研究の方向性を確かめ合い、教職員が主体的に活動に参加し、礼文教育の改善に当たる組織と体制を創ったところである。

Ⅲ まとめ

1 成果

- (1) 地域の特性を生かし価値ある教材・人材活用を教育計画に位置付け豊かな体験活動を創ることにより、教育課程改善の視点が明らかになり、地域と一体となった特色ある学校づくりを進めることができた。
- (2) 子どもが地域社会、人と直接関わる体験を通して、地域の一員として認められ、地域に役立つ経験により自己肯定感・有用感が高まり、社会に貢献しようとする意欲が高まる。また、地域住民への信頼と愛情、ふるさとへの誇りと愛着を育んでいる。
- (3) 学校の特色や活動の意義を発信し理解を得るとともに、地域住民・保護者による学校教育への「参加保障」により、子どもの成長を共に感じながら、地域に根差した特色ある教育活動を創り出すことができた。
- (4) 校長が、地域と積極的に関わり、学校と学校をつなぐ、地域と学校をつなぐ、組織の中心的役割を発揮することで、地域・保護者との信頼関係を築き、協働の基盤を創るとともに、教職員の協働による主体的活動を組織し、子どもの実態に基づいた教育活動の充実・改善に向かう教職員の意欲が高まった。

2 課題

- (1) キャリア教育と教育活動のつながりを整理し、小中高9年間（小中高12年間）のねらいを共有するとともに、求める子ども像を明確にし、教育課程改善を図っていく必要がある。
- (2) 校長は、各地区・町村単位で、キャリア教育における改善の視点を共有し課題解決に当たる連携を強化し、継続していく必要がある。
- (3) 学校間の連携と教育研究の充実により、教職員が主体的に教育課程改善に関わる協働の意識を高め、指導の改善を図っていく必要がある。